

雪窓宗崔伝の史料的検討

大 桑 齊

豊後臼杵の妙心寺派寺院多福寺の二世で、その著『対治邪執論』が「江戸初期における仏僧の排耶書としては出色のもの」と評されている雪窓宗崔の伝については、しばらく前までは何ほどのことも知られていなかつた。南禅寺の僧であると永らく信じられていたのを、妙心寺派多福寺の住侶であることを始めて明らかにしたのは新村出博士であり、これをうけて、ようやく最近になつて、海老沢有道博士とその門下村井早苗氏など、キリンタン史研究者の努力によつて、その略伝が紹介され、あるいは排耶活動史のうちの位置が論ぜられるにいたつた。^②

これとは別に、禅僧鈴木正三研究の過程で雪窓に注目した筆者は、これら先学の研究に教えられ、関連史料を採録することができた。ここではまずその伝記史料を紹介し、

若干の検討を加えていきたい。これまで雪窓関係史料が世に知られなかつたのは、多福寺現住関貫道師が強調されるように、雪窓及びその後を嗣いだ三世賢巖禪悅が、名利を好まず、その伝や語録をして山門を出せしめず、以後歴代住持またこの遺誠を遵守したからに他ならない。今回紹介する伝記史料は、それとは別に、臼杵藩主稻葉家に伝来され、現に臼杵市立図書館に移管されたものであるが、それでも他に伝写本がない点で、秘蔵されていたことにかわりはない。また、伝記の検討にあたつては、多福寺史料を用いているが、特に今回利用を許されたのは関師及び臼杵図書館の御好意によるものである。記して感謝としたい。

さて、臼杵市立図書館蔵『雪窓和尚行状』(以下『行状』といふ)は、七行十六字詰で十六葉のもので、雪窓没後二

十五年目の寛文十三年に賢巖が著わしたものである。多福寺に所蔵され、四世までの伝を収めた『多福行由』（以下

『行由』）によれば、賢巖は寛永十一年十七歳で雪窓の門に入り、間もなく行脚に出で、雪窓の寂する慶安二年まで帰ることがなかつた。従つてその著わす『行状』の記事は、伝聞によるところが多いようで、年代などにあいまいさが残り、また誤認と思われる点も含んでいる。

賢巖はまた、延宝三年に雪窓に仏智不昭禪師号が謐られたのを機に、同七年『仏智不昭禪師行狀』の題名で補訂を試みている。これも稻葉家伝來で、臼杵市立図書館に移されていて、十行野紙に二十字詰十一葉に書かれたもので、量的に短くなっているのは、雪窓が法隆寺で製した維摩經頌の部分を省略したことによるものである。この他は、ほとんどが字句、文飾の補正であつて、内容的には大差がない。ここでは寛文十三年の初稿本を紹介することにしたい。その全文を次に掲げる。できるだけ原文に忠実であることをこころがけ、返点、送り仮名も原文のままとしたが、異体文字などを正字になおし、句読点を加え、また適宜段落を区切るなどの若干の私見を加えた。

(表題)
「雪窓和尚行狀」

再住妙心雪窓崔和尚大禪師行狀

師嗣ニ心岳精和尚、諱宗崔、字雪窓、別號為ニ虛舟ト、俗姓池田、豊之後州直入郡人、天正十七年己丑歲生、曾高曾為君園村主、父名宗也、母小嶽氏益先之女也、皆為ニ士族、母夜夢、一厖眉僧授レ珠函取而呑之、覺即有孕、及レ誕狀貌嶷如、纔離ニ襁褓、每レ見ニ佛像、必胡跪合爪、作ニ歸依狀、父母憶ニ夢事、且知ニ志在ニ茲、俾下依ニ本縣真正寺、祝髮為上座弟子ト、時師十一歳、久之行脚至ニ海部、善正寺、兩寺皆業ニ於專念法、不レ事ニ學問、嘗歎曰、教海浩深、禪宗幽玄、我年壯也、誓欲窮之、時府城ニ有ニ技術、禪宗諸德與ニ大守一座談自若、師仰觀歎艷之曰、嗟呼、為レ僧當如レ此也、若ニ我曹、猶犬耳、樂舞未レ閑憤起歸寺、悒々不レ樂、此夜師夢、登ニ一山、甚秀麗重樓飛閣、金碧絢爛、殆非人間、覺以爲、吉徵ト、自計、化龍之魚肯ニ蹄滲ニ求レ生乎、李斯不レ向ニ倉中ニ悟、豈能取ニ秦相ニ乎、翌旦入ニ邑多福禪寺、授ニ了室密和尚ニ更衣、時慶長十八年、師歲二十五

居無レ何撥草瞻風、師依止處必常執ニ賤役、般ニ水柴、除ニ便旋、凡レ所レ不レ為、至ニ肩起ニ癌、常竊練ニ木屐綦、藏ニ之席下、到ニ夜為衆易レ之、人無ニ識ニ之者、初參ニ鈍鐵山、

タ一見器許ス、元和乙卯、宣說心駿之清見寺、一夏講碧巖集、衆幾五百、覆講五人、師亦與焉、預白方丈、不レ釐諸務、專勤研究、其四人前後雖怠其業、師獨得終レ之、越明年雲游武州、愚堂寔、大愚築、雲居膺、了堂歎、皆在焉、師歲最少、往来款密、結レ交維深、或時共歎曰、古
人三二十年、不頃刻間雜用心、念々相應如雞伏卵、尋
師訪友、如救頭然、琢磨淘汰、心々相契、印々相證、
淨盡無疑、道香果熟、諸聖推出、為人天師、一言半句、
耀古騰今、代佛揚化、續佛慧命、莫レ令断絶、以此
報恩德、以此資君親、不ニ亦至ニ乎、方今剃髮染衣者、
雖滿域中、無一个皮下有血底漢、專耽外學、習文習書
詩、記活套子話、以為究竟、於自己脚跟下生死大事、
渙淳然無言及之者、亦不謬乎、吾儕幸是色力康健、追
等閑名、肯與時流較長短乎、但從今日去、二六時
中孜々精進、更無餘好、若不破疑團、誓不休矣、互相
激勵、不覺泣下潛然、自時厥後、各專一於是共成大
器、聲名讙于叢林、妙心門下三學漸興、職此由之
師後訪雲居、聞師道價、以上賓迎之、寒溫既畢、
言論鋒起、居歎曰、當今學者、那能得如子者、扶起正
法者、捨子誰乎、子厚愛、師留三日、時海內禪席寂寥、
去入那須雲巖寺之後山、久擬禪定、一時於定中、忽打

疑團、反觀佛祖言句、若獲舊物、心身泰然矣、後看圓覺經、益深造詣、復來武江、時師名喧於州宰之間、海部府君戶部侍郎一雲居士、見而喜甚、曰、不レ意我弊邑有恁麼佳衲子、由是再興多福寺、請之、卑己問道、厚加崇禮、

寬永癸酉春、師轉位、妙心第一座、今年冬、在和州法隆寺、聽維摩、法華、勝髮等諸大乘經之講、時師於維摩經、每品頌之、佛國品頌云、八地薩埵、淨佛國、下化衆生即上求自行直心、應物現諸根利鈍、作同流、方便品頌云、假臥病牀、善方便苦空無常令人知、泡影等喻、破我見、天真獨朗更無私、弟子品頌云、十大弟子不問疾、各說本緣、嘆辨才、五百聲聞所得法、居士言下作死灰、菩薩品頌云、彌勒說法一生記、光嚴問來共所罵、持世波旬却議解脫法、人間天上只廢看、觀衆生品頌云、文殊奉勅問所疾、幻師見幻人、普說如斯法、利益無疎親、佛道品頌云、維摩非道、達佛道、放名相、立生涯、文殊無明如來種、卑濕淤泥有蓮華、不二法門品頌云、一有多種、二無兩各說已、不二法門、賊々同途不、敵、文殊淨名報佛恩、

香積佛品頌云、香積如來與香飯、維摩居士現神通、令菩薩衆會、却如故三千世界起香風、菩薩行品頌云、衆香菩薩問行門、示盡無盡解脫門、教化衆生、終不倦觀空、打開大悲門、見阿閦佛品頌云、輕取妙喜、置此土、無動如來體現中、菩薩天人無不見、淨名三昧得神通、法供養品頌云、此法供養勝財施、清淨無染、冠諸經、依實相義、救毀禁、六道衆生現本形、囑累品頌云、無量劫來所集法、付囑彌勒、濟未來、阿難奉勅、要流布、四天擁護、誓無災

時有彌勒院某者、彼宗之髦也、師問以宗門下事語之、渠拊髀曰、初知禪宗有如此奇、即就師更衣、後嗣愚堂、號絕同、已卯聞櫟尾玄俊律師、有戒學之譽、依之聽聞遞、俊喜得人、悉盡蕪奧、今傳授流布、今年聞東山泉涌寺恕周、博洽教乘、復與之遊學百法俱舍等論、周亦素聞師名、故堅請師、請碧巖集、師雖恐有將金彈換銀彈之謂、不得已、為渠講之、師據

於古人機緣語句、節々下語、師家證之、以當龍參、觀其行解、俗士之不若、昔無業禪師每歎叢林不自揆、襲過謬多、生異見、司法柄者、執平常無事、以為是、

却不信有此悟、以佛祖一切言句、皆以為方便、以何罪何善、詭俗士、渠以與見合、易成歡服、斯見一起、邪毒入骨、不可永出、誠可歎息、究其所因、最初被個本來具足、不假外求之說、一印々定、自以為易、不復光明、便乃不拘律儀、任情毀犯、自以為高、回首來視其人、則依然三毒未息、五欲熾然、殊不知本來足之說、如麵在麥中、飯居穀內、或不加春煑磨礪之勞、徒知具足之虛談、終莫能得止飢之實效、更有二等、隨語生解、穿鑿理路、意識分別、不知佛祖向上事有超情離見底要、況諸聖大解脫門、唯有過量人、乃能徹證、要玄路絕聖量盡少分相應、若不爾者、皆依他作解、記問傳習、認目前光影、隨逐聲色、墮斷常坑塗、五入邪路、直指之道、遠之遠矣、蓋此宗動念、即背擬、心即差、千聖拱手、魔外無窺、佛欲得現前、莫存知解、枯憚看教未免、皆為障礙、何如一物不立、而起居自在乎、從上宗匠、不得已、垂示一言半句、則如塗毒鼓乾天雷、初是半提所以德山之棒、臨濟之亦喝甚不得已爾、第近年來邪風毒氣、弊惡極矣、此道興廢、已係釋氏善惡、豈得不戚々乎此哉

師恁麼雌黃古今、辨白是非、橫說堅說、無所忌憚、洛下道俗、蠅聚蟻附、得下聞未聞發久蒙、時道譽達于

天聰一
太上皇詔ニ永源一絲禪衲、召レ師見ニ便殿、對ニ于
上、評ニ麻三斤之則、是乃

皇情之所願也、奏對稱

旨、慰勞優渥、尤所以扶正斥邪、伐異歸同、出入
禪教、益溫釋之、袞々如縣江河、瀰漫莫可涯涘、師氣
岸雄、而貴賤一視、言音如雷震、朝納咸言、三百年來實
鮮匹休者、當此佛日晦冥之時、有若魯陽返三舍焉、
忽出于四極西、登于九重上、親對一人、談吐如常、何
其英哉

正保乙酉春、再行化武野、說法度人、土庶嚮慕、如水

歸壑、明年丙戌、師歲五十八、勅賜紫衣、視篆京妙心寺、
已而解職而歸、未幾師嘆曰、所貴沙門行者、弘法度
生、何所容心哉、我感物情深、豈匏繫一處、以安逸為
樂乎、四年丁亥、振錫西邁、到肥之長墳、縉素々稔師
之名、驩迎如見佛、歸依信向、比於京武、猶以為甚、
遠邇翕集、至無席受之、門牆之上、衆人鱗次、長墳監察

使井上築後守、令十二長墳衆、分爲四、每日更番而聚、長
崎昔耶蘊宗之盤窟也、雖官禁之嚴、未有敢心誠服者、
師一到則銳智刃、斫伐邪林、提示正法、一衆稱希有、
屠沽爲之易業、其受戒者萬有八千人、井上氏欲上聞于

民、師遷化而事遂寢矣、黑白之衆、不勝其愛慕、輿論請
明僧也懶々、不幸而溺海、繼請今隱元禪師、後木菴即非、
踵武來焉、本朝禪學、於是乎中興、長墳父老迨今道之、
正法復熾、師之功過半矣、今年五嶋之請、海颶頓起、
船欲漂沒、師默念觀音、以故得免

師初歸於長墳、時予在妙心寺、召囑後事、至冬雖
有微恙、震艮如常、有問和尚尊候如何者、師便對曰、
我病明年三月痊矣、人無論其意、及至于春、飲食如舊、
二三子無有憂慮、一旦黎明、喚童子曰、今日雨且降、
否、童子曰否也、已而鼻鼾又齁々、日既三竿、然怪師未起、
童子撼且呼之、鼻息絕久、枕席不動、手足宛然、顏面
如生、頂上留煖氣、園鄉驚走、無不悼惜者、至晚行
荼毗法、氣無惡臭、奇芬襲人、結龕于寺正南高處、瘞
骨灰焉、窓壙之後、庭松一株將枯、年餘復青、師於是
世壽六十一、僧臘三十有七、寶慶安二年己丑三月二十五日
也

師廣額豐頤、圓臚大耳、胸次恢廓、無畦町、喜怒任真、
言行純慈、不修飾邊幅、雖接顯貴而語無阿順、雖
混側陋、而言無驕恣、雖面折人過、而胸中無留物、
明教大師所謂以怒罵之作佛事者也、出語質朴、不改

寛文十三癸丑三月十四日

手度弟子賢巖禪悅謹狀

鄉音、扶植時彦、至于尊賢尚德、不掩人善、推己及物、有非人之所及、長國寺周公、禪律學也、舜統院真迢天台學也、玄俊戒律學也、萬安曹洞宗也、及至于延壽寺某、永照寺某、吾師皆布心腹於其間、不問自他之門、況於宗門之鉅公乎、蓋師之慮、大概勉人、捨妄入眞、無乖於聖教而已、今時學者、習教者略禪、習禪者略教、師兼而有之、故其化導衆生、則禪教雙舉、不局一途、其說法如山川出雲、滂沛演迤、有不知其所以窮、大慧所謂大方家手段、禪備^{ト云}衆格者非乎、呵棄二百年來句參話會謎子訣之禪、發揮單傳直示之旨、今有^ニ道滿寰宇、名傳紫震、然不以名位、自高上、與衆作息、問知非者、正法殆回春、師之力居多矣、震黃鐘於瓦釜、雷鳴之際、翔靈鳳于衆禽紛飛之秋、可謂其衛道之功大矣、道滿寰宇、名傳紫震、然不以名位、自高上、與衆作息、甚雖^レ至於勞勸、弗敢少懈、甚惡遊手素殲者、門庭嶮峻、不度弟子、尤慎許可、師之著述、有^ニ竹馬教、對治邪執論、禪敎統論、與福筆記各一卷、其餘偈頌文章、皆嚴不許錄、故知者鮮矣、抑至師之細行、與其道之精微、皆非^ニ筆墨可形容、師示寂後二十五年、作繫其梗概、是皆所^ニ以人耳聞目見也、恐年久泯滅、禪悅不文也、非欲^レ白^レ之天下、示^ニ之子孫、皆曰、其先如^レ是、於戲吾曹何無似哉、欲^ニ永以爲鑑戒、云爾、

雪窓の伝記は、この他にもいくつか見出しうる。その第一は、前述の『多福行由』である。賢巖の侍者であった祖全が、元禄十二年に著わしたもので、『行状』とは別の史料にもとづいたようで、内容的にかなりの相違がある。第二に、松島瑞巖寺の天嶺性空が享保十七年に著わした『燕南記譚』(以下『記譚』といふ)后集に「雪窓訪雲居」の一項があり、雲居希膺との会見を中心に約四百字の略伝をなしている。瑞巖寺はこの雲居が入寺し、天嶺性空もその法系に連なる人物である点で注目すべき伝である。第三は、寛保二年豈後の禪僧密雲彦契の著わした『豊鐘善鳴錄』(以下『善鳴錄』といふ)にも七百六十字余の略伝が収められてゐる。密雲彦契が、豈後に關係する禪僧の伝を「啓ニ諸山春宿、或探ニ之断碑口碑」という努力のすえにまとめて下されたもので、地元に伝えられた伝として、これまた独自な位置をもつものである。

さて、『行状』の記事を要約して仮年譜とし、以上の諸史料との対比を中心として検討を加え、雪窓伝を再構成することを試みていきたい。

一、生 誕

天正十七年（一五八九）、豊後直入郡で、君園村主池田宗也を父に、小穢益先の女を母とし、靈夢をもって生れる。生家池田氏を明らかにする史料は管見に入っていないが、戦国末期の在地土豪の家柄である。『行状』では、その生誕の地を明記せず、君園村であった如くに読みとれるが、『行由』・『善鳴錄』は直入郡松本人とし、『白杵寺社考』^⑩では竹田の産としていて異説がある。松本については『豊後国誌』^⑪の「直入郡村里」にみえず明らかではないが、同書には君園がみえており、竹田の街で稻葉川と合して大野川となる玉来川流域に所在しているから、元来この地の土豪であった池田氏が、竹田に居していたとも考えられ、諸伝のいうところは竹田城下乃至はその西の玉来川流域に生まれたことをいうものであろう。

二、出家と転宗

慶長四年（一五九九）、十一歳。真宗の真正寺に入つて一度、次で白杵善正寺に移る。慶長十八年（一六一三）、二十五歳、禪宗に転じ、多福寺了室密和尚に投する。

最初に入った真正寺は、竹田城下の近く玉来にあつて真宗西派に属し、善正寺も同じく西派で、大野郡田中村明尊寺の住侶願了が、天正十六年白杵に來たつて開創と伝え、

このとき随伴したのが雪窓であつたというが、雪窓の生れる前年に白杵に來たことになつてそのまま信用できない。^⑫

転宗の契機は、『行状』によれば、白杵城内で藩主と歎談する禪僧をみて「僧タラハマサニ此ノ如クスベシ」と感じ、その夜夢をみて決意したとあるが、その基本的動機は、真宗が「専念ノ法ヲ業トス」ということに批判的であつたことにある。^⑬ 専修的仏教への批判は、彼の生涯を貫ぬくものとして、この動機は注目しておかねばならない。

このとき師事した多福寺の了室密とは、『行由』によれば了室宗密のこととし、白杵城主稻葉氏と同郷の美濃の産で、『鉄山和尚之手度、且嗣法之真子』^⑭である。慶長六年稻葉典通に招かれて多福寺開山となつたもので、以来多福寺は鉄山宗鉢の法系の寺となる。

三、参禅と法系

入寺後まもなく行脚に出、鉄山宗鉢に参じ、元和元年（一六一五）、二十七歳、駿河清見寺で宣説心の碧巖録を講ずるに列する。

雪窓が最初に参じた鉄山宗鉢は、織豊期妙心寺派で名の知られた禪僧で、武田信玄・徳川家康らの帰依をうけ、駿河臨濟寺に住していた。『行状』では、あたかも臨濟寺へ到つたかの如くであるが、古田紹欽氏によると、慶長十三

年以降は妙心寺山内に大龍院を構えて退隱していたから、雪窓の參禪はこの大龍院においてであつたとせねばならない。『行由』に「直參駿府鉄山」とするのは誤りであろう。次で駿河に下り宣説心の講席に連なるが、これは説心宗宣のことであり、鉄山と同門の大輝祥遼の弟子であるから、鉄山の推挙によるものであろう。

このように、雪窓は鉄山派の法系に参じてゐるのであるが、『行状』が冒頭に嗣法の師と記している心岳精和尚もまた鉄山派である。『行由』に「予州宇和島正眼院」の住とし、『善鳴錄』では元和末～寛永初年と思われる箇所で「師遂見予州正眼院心岳精和尚、親承関山正脈」とみえている。心岳は、鉄山の嗣法大室祖丘の嗣であった心嶽玄⁽¹⁾ことと思われるが、その住した正眼院の所在も不明で伝も知られず、雪窓との交渉については一切わかつてない。

四、修行の盟約

元和二年（一六一六）、二十八歳、江戸に出て愚堂東寔、大愚宗築、雲居希膺、了堂宗歎らと交遊。禪界の頽靡をなげいて、共に復興のために修行せんことを盟約。のち雲居をたずねて激励をうけ、那須雲巖寺の後山に入り、疑团を破する。

雪窓らのこの盟約は、近世仏教の復興をめざしての諸僧

連携の始まりとして注目すべきである。すでに別稿で言及したので伝記的検討のみを略述する。盟約諸僧中、元和二年から七年まで大愚のみ在府が確認出来、元和七年には愚堂の出府が知られ、また、これに加わった鈴木正三の伝からみてもこの盟約は元和七年と考えられる。一方、雲居がこれに加わっていたことは確証がない。『行由』では「又

雲游武城、愚堂、大愚、了堂諸老在皆」とみえ、『善鳴錄』も雲居の名をあげておらないのはその証左であろう。『行状』では、この盟約の直後に再び雲居と会った如く記しているが、もう少し年代を下げて考えるべきである。

延宝本『行状』では、「師後訪雲居於松嶋」と改め、『行由』は、雲巖寺大悟の後にかけて、やはり松嶋での出会いをいい、『善鳴錄』もこれをとっている。しかし、雲居が松島瑞巖寺に入るのは、伊達政宗の懇請を拒みとおし、その嗣子忠宗の請によつた寛永十三年のことである。このころの雪窓の行状からみると、奥州へ向つたとは考へがたく、松島会見説もとりにくい。ただ『記譚』が、雪窓の多福寺入寺の寛永八年以後に、「師再遊関東、參扣雲居曾祖、從⁽²⁾加藤明成、住会津弘誓寺」とするには注目してよい。元和七年頃から伊予松山の加藤氏の外護をうけていた雲居

しかし、その後ほどなくして摂津勝尾寺にかくれたことからすれば、雪窓が会津に雲居を訪ねたのは、寛永五年から一七年の間、雪窓の多福寺入寺以前に求めることが出来よう。

五、江戸での活動と多福寺入寺

雲巖寺大悟の後、江戸に帰って名声をあげ、寛永八年（一六三二）、四十二歳、稻葉一通の帰依をうけ、多福寺を再興して入寺。

那須雲巖寺後山での修行と大悟は、その前提となる修行の盟約を元和七年と考えれば、この年から翌八年にかけてのことであつた。江戸での名声を得たのちの多福入寺は、『行状』の記事ではそのご間もなくの如くであるけれど、元和二年に了室の示寂によつて廃寺となつていた多福寺が再営されるのは寛永八年のことであり、この間に十年の年月を経ている。多福寺には、「寛永八年仲夏上浣之吉、大明興福禪院比丘如意定書」とある寺号額が現存している。その筆者如意定は、中国揚州興禪院の黄檗僧で、寛永九年に来朝し、長崎興福寺に入っている。^⑩ 長崎興福寺は、のちに雪窓が排耶説法を行つた寺であるから、おそらくこのとき依頼して出来たものであろうが、いまだ如意定が来朝していない寛永八年の日付であるのは何か不自然で疑問が残る。

六、賢俊・如周・後水尾上皇との関係

ところで、多福入寺までの十年間の行状については、『行由』は「会津少将正光、就師請問禪語、礼謝供金欄法衣」という記事、さらには「惺窓門下書生、為方外交、師雅機對誓速、而精理出其右」と記している。また『善鳴録』は「会津少将正光」の帰依及び伊予正眼院心岳精からの嗣法をかかげる。このうち、『行由』にのみ見える藤原惺窓門下生との交遊、朱子学にすぐれていたという記事は、これを直接裏付ける史料は見出せないにしても、彼の思想における心学的傾向についての一つの示唆となるものであり、今後の課題として注目しておきたい。

また、「会津少将正光」とは、寛永二十年に会津に入部し、正保二年に左少将となつた家光の異母弟保科正之のことをあるなら、寛永八年に信濃高遠三万石を継いだから、江戸で雪窓にそれ以前に帰依したにしてもいまだ部屋住のところであつたことになる。また、これが正之の養父保科正光をさすなら、「会津少将」と呼ばれるのは正しくない。おそらくは、「会津少将」の帰依が伝えられており、これを多福寺入寺前にかけたために正光の名が宛られたものであらうから、事実は、保科正之との交渉がもつと後年にあつたことにもとづく誤記と考られる（後述）。

寛永十年（一六三三）、四十五歳、妙心寺第一座となる。

この年冬、法隆寺で諸大乘經典の講を聴き、維摩經頌を作り。弥勒院某、雪窓に帰し、絶同と号し、のち愚堂の嗣となる。また、榎尾の賢俊良永に受戒し、東山泉涌寺の惣周と交じわり、請われて碧巖集を講ず。道譽を聴いた後水尾上皇の請をうけ、麻三斤の則を評する。

右の諸記事事は、『行状』では全て寛永十年にかけて語られているが、年代的に多くの問題点を含んでいる。同年の妙心寺第一座となつたことについては、特に疑う理由はないが、その年の冬の法隆寺での諸記事事は、さらに早い年代と考えられる。すなわち、鈴木正三の伝記には、元和八年

「豊の雪窓和尚、高野の玄俊律師と同く和の法隆寺に投じて、律を綜い經を学す。廻ち沙弥戒を俊律師に稟く」とみえ、雪窓が正三と共に賢俊から受戒したことあげている。正三伝ではこの年次に問題はないと考えられるから、雪窓の賢俊受戒は元和八年と考へねばならなくなる。従つて、

葉氏に招かれて多福寺に入り、寛永十年に妙心寺第一座となる、という順序であろう。

泉涌寺⁽²⁾如周との最初の出会いは、元和八年の法隆寺行のときであつたかも知れない。如周は元和末～寛永初年には

南都にあって、興福寺空慶に師事していたことが知られてゐるからである。けれども、如周が禪への関心をもつのは、寛永七年の醍醐修學をへた同十三年、東福寺善慧忠への参禪の時であると考えられるから、雪窓と会したはこれ以降のことであると考へたい。この頃如周は、泉涌寺に雲龍院を復興し、これには後水尾上皇の援助のあつたことが知られているから、雪窓を後水尾上皇に引きあわせる契機が存在している。もとよりそこには、『行状』のいうように、直接の媒介者となつたのは一絲文守であるが、彼もまた賢俊から受戒した人物であつたから、いはば賢俊受戒の同門の徒であったのである。

七、江戸下向、妙心出世、長崎説法

正保二年（一六四五）、五十七歳、再び江戸へ下向。翌三年、五十八歳。紫衣勅許をうけて妙心寺に住山。同四年、五十九歳、長崎へ行き排耶説法を行い、受戒する者一万八千人という。

正保二年の江戸再遊の理由については、『行状』は何ものべておらず、わずかに『行由』が「列刹請、点検諸錄」⁽²⁾という目的をあげるのみである、けれども、これ以降の雪窓の行状、とくに長崎排耶説法は、これ以前の彼の軌跡のうちから、内的必然性を見出すことがきわめてむつかしく、

むしろ唐突な感すらある以上、一連の行動の出発点となる江戸再遊については検討を加える必要がある。江戸再遊そのものは、『行状』にいうごとくさらなる研鑽を求めてなされたものかも知れないが、ここで先述の「会津少将」保科正之との出会いがあつたと仮定してみたい。あたかもこの年保科正之は、家光の嗣子家綱の元服に立合ひ、以後家綱の後見人として、幕閣にしだいに発言権をもちはじめる頃であった。同じく家綱の守役となつた松平和泉守乗寿は、鈴木正三と親交があつたから、家綱側近グループと、雪窓、正三らのグループが結合したという可能性は大いに考えうることである。これらはいまだ推測の域を出ないが、さらに屋上屋を重ねれば、翌三年の妙心寺住山も、これら家綱側近グループの推挙とみることができようし、それはさらには、長崎排耶説法への伏線であったと考えることもできる。

『行状』には、こうした証は一切ないが、『行由』が「領宰官之命、到肥之長崎」とい、『善鳴錄』が「因釣命、講經于興福寺」というように、共に長崎排耶説法を幕命によるものと伝えているのは注目すべきである。

かくして正保四年五月六日から二十一日間にわたつたといわれる興福寺での排耶説法がなされた。多福寺に藏されている『長崎興福寺説法筆記』は、この年七月上灘の日付で雪窓の序文が付けられているから、説法が終つて二ヶ月たたない内にまとめられたものである。この書の内容の検討は後日を期したいが、それは、従来説法の記録であると信ぜられてきた、正保五年の年記をもつ『対治邪執論』とは大巾にことなつてゐる。一言でいえば、『説法筆記』は、念佛や題目の専念を主張する真宗・日蓮宗を批判し、禪教一致、禪念佛の重修を説くもので、キリストian批判はその線上で冒頭部分にのべられているだけである。このことによつて、雪窓のいわゆる排耶説法は、幕命によつてなされたとはいえ、彼の生涯の思想であつた禪念佛重修を内容とする近世仏教の形成運動の一環としてなされたという、内的必然性をもつことが明らかになる。

従つてまた、この説法によつて多くの人々が受戒したといふことも、キリストianが転じたというよりは、信仰以前の人々が雪窓に帰依したことを意味している。『行状』では一万八千といい、『説法筆記』には、最初の説法で「受三皈五戒者、一千五百二十人」、さらに一向宗の説を破した説法では受戒者二万一千三百人と記されている。

かかる群集を、「長塙ノ監察使井上築後守」が町衆を四組に分けて、交替で聴聞せしめたと『行状』はい。『説法筆記』でも「全六十三町男女、作七部、向毎部前、説法

要者、都限二日、経十四日竟」とあって、『行状』のいうところを裏付けている。ただここには、井上筑後守政重の

名はみえないが、自然発生的に組分け聴聞がなされたとは思えず、やはり公権力の介在を考えねばならない。おそらく直接の支援者は長崎奉行馬場利重であつたであろう。

ところで、雪窓の排耶説法は、いかなる状況においてなされたかをみておく必要があろう。井上政重の行動を追つてみると、このことが明らかになってくる。雪窓が江戸に出て正保二年正月五日、七月十日には、政重が老臣会議に加わって何事か密談を交わしたのを始めとし、三年正月二十一日老中酒井忠勝、阿部重次、寺社奉行松平勝隆、長崎奉行馬場利重と共に、將軍から何事か直命をうけ、二月九日、三月十四日にもぼ同様なことがあつた。これらの結果であろうか、この年十一月十日には邪宗探査が井上政重と日根野吉明に命ぜられ、十一月十四日・二十三日にはこれらの人々を加えて御前会議が開かれている。このような幕府のキリストン探査の強化の動きの内に、正保四年五月に雪窓の説法がなされたのである。加えてその七月、長崎へポートガル船着岸という事態がおこり、井上政重は急ぎ長崎へ下つた。雪窓の説法の終つた後であるが、『行状』などが説法そのものを政重と関係づけたのは、まつたく根

拠のないことではなかつたのである。

八、示寂と明僧招請

慶安元年（一六四八）、六十歳、多福寺に帰り賢嚴禪悅の後事を嘱す。冬より病をえる。翌二年（一六四九）、六十歳、三月二十五日示寂。これより先、長崎人士雪窓を愛惜し、代るに明僧也懶を招くも、渡海中に遭難。これによつて隠元ら來朝する。

『行状』が右にいう如くに黄檗僧の来朝を雪窓に關係づける説は、従来いわれてこなかつた。黄檗僧招請には、當時の長崎興福寺の逸然性融の働きかけがあつたことは知られているから、興福寺で説法をなした雪窓に關係づけられたとみることもできる。けれども、ただそれだけのことではなく、雪窓の思想が禪念戒の重修、あるいは禪教一致の立場であつたから、同様に三教一致、禪念一致の性格をもつてゐることもできる。されども、ただそれだけのことではある。興福寺三世逸然性融もまたその一人であつた。さらには、先述の、興福寺二世默子如定の多福寺号額のみられる如き雪窓と興福寺、いいかえれば黄檗派との深い関係などが改めて思いおこされてこよう。隠元渡来に関する諸問題は、こうした観点から再検討されることが必要である。

九、真宗との関係

雪窓の交遊は、泉涌寺如周、舜統院真迢、賢俊良永、万安英種など、宗派をこえた広がりをもち、そのうちには、真宗の延寿寺月感、永照寺西吟が含まれている。雪窓の思想が、専修を排し、禪念戒の重修を主張するものであったから、その交遊が、宗派を越えた広がりをもつのも当然であった。右にみえる人物中、いまでふれてこなかつた舜統院真迢は、日蓮の徒から天台宗に転じて、念佛と戒をとり入れ、万安英種は曹洞宗において宗統復興運動のさきがけとなつたという経歴をもち、共に鈴木正三と交遊がある。^⑩これらを含めて、いわば近世仏教復興運動の人脈をなしているのである。

このグループに真宗西派の月感・西吟の名がみえるのであり、両者の間に西派教学論争、いわゆる承応の闘牆が争われたことは興味深い。この論争のうちで、月感は西吟を「此ハ九年ホト^⑪已前ニ、豊後ノ雪窓ト申ス禪僧處へ罷リ越へ、禪法ヲ承」^⑫つたと批判し、西吟は「我等ノカノ雪窓ニ值テ臨済錄ヲキク……何ノ過カ候ハ^⑬ン」と反論して、雪窓との交遊を肯定しているのである。

かかる西吟教学が、通仏教的であるといわれ、あるいは自性一心の禅であると批判されるのも、むしろ当然であつた。しかし、これをもつて西吟の異義性を論断するのでは

なく、禪念戒重修、専修性否定という方向で近世仏教が形成されていこうとしているとき、これに積極的にかかわつた真宗教学者が存在したこと、そして、彼等もまた、そうしたなかで近世仏教としての真宗の形成を模索していたことを知らねばならない。

ここに真宗思想史が仏教思想史との接点をもつっていたのである。雪窓が元来真宗に出発して禪に転じて、禪念戒重修を主張したこと、と同様に、真宗から禪へ、そして黄檗派へと転じた肥後の鉄眼の存在もまた注目されねばならない。鉄眼は、西吟に師事した経歴をもち、また多福寺三世賢巖とはきわめて親しい間柄であつたといふことも、近世仏教形成史に真宗を位置づける一つのカギとなるものであろう。

最後に、以上の検討で判明した雪窓の行実を略年譜としてまとめておく。

雪窓宗崖年譜

天正17（一五八九） 豊後直入郡竹田近辺に生る。
慶長4（一五九九） 十一歳。直入郡玉来の真宗西派真正寺で出家。次で白杵善正寺の願了に師事。

慶長18（一六一三） 二十五歳。多福寺了室宗密に投じて禅宗に転ずる。まもなく行脚に出、妙心

寺大龍院の鉄山宗鈍に参禅。

山。

元和 1 (一六一五)

二十七歳。駿河清見寺に説心宗宣の碧
巖錄講義に列する。

元和 7 (一六二一)

三十三歳。江戸において愚堂東寔、大
愚宗築、了堂宗歇及び鈴木正三と交遊。

元和 8 (一六二二)

禪の復興のため修行の盟約を結ぶ。
三十四歳。正三と共に法隆寺に到り、

賢俊良永から受戒。のち那須雲巖寺後
山にかくれて修行、大悟。

四十二歳頃まで。江戸にあって活動。
(?)一六三〇) 朱子学徒と交遊(?)。寛永五年(?)七年
に会津に雲居希膺を訪ねる。

寛永 8 (一六三一)

四十三歳。稻葉一通に招かれ多福寺に
入る。

寛永 10 (一六三三) 四十五歳。妙心寺第一座となる。

寛永 17 (一六四〇) 五十二歳。後水尾上皇に招かれて参内
説法する。これより先、泉涌寺如周と
交遊。

五十七歳。江戸下向。このとき保科正
之と交渉あり(?)。

五十八歳。紫衣勅許をうけ妙心寺に住
正保 3 (一六四六)

正保 4 (一六四七) 五十九歳。長崎に赴き、興福寺で排耶

説法。『長崎興福寺説法筆記』に序文。
六十歳。『対治邪執論』を著わす。多

慶安 1 (一六四八)

福寺に帰る、冬より発病。

慶安 2 (一六四九)

六十一歳。三月二十五日示寂。

註

① 『キリストン書・排耶書』(日本思想大系)解題。

② 同右、及び海老沢有道『対治邪執論』とその著者雪窓宗

崖(同著『地方切支丹の発掘』所収)、村井早苗『雪窓宗崖

小伝』(白杵史談66号所収)、同「幕藩制成立期における排耶
活動」(日本史研究、一八二号所収)。

③ 奥書には次のようにみえている。「元禄十二龍集屠維单閑
仲春上浣曰、慈山嗣法門人祖全稽額百拜謹記」

④ 京都貞葉堂刊本による。

⑤ 『禪學大辭典』所収「禪宗法系譜」には、雲居希膺—洞水

東初—通玄法達—天領性空とみえている。

⑥ 『曹洞宗全書』20拾遺』所収。

⑦ 白杵市立図書館蔵。著者・成立年次不詳。

⑧ 伊藤猛・田能村孝憲、享保三年著。昭和六年刊本による。

⑨ 『豊後国誌』一六一頁。

⑩ 産『白杵寺社考』では、善正寺について「開基了願者濃州之
産也。姓源氏武田末裔也。若年時住豊後州大野郡田中村(今岡

- 明尊寺、天正十六戊子年讓明尊寺于門弟、來遊臼杵、此時門第一人（後改宗為禪派住同多福寺靈和尚是也）（下略）とみえる。また多福寺の項で雪窓について「同國直入郡竹田產也。善正寺開基願了、同宿而從來於竹田田中村、後改宗四十八歲遷化」としている。
- (11) 善正寺（臼杵市仁王座町）の『由來記』では雪窓の略伝を掲げている。それには「天正元癸酉生、竹田玉來之產也、了師取此兒為弟子、隨了師來此地、時年十六」というように、天正元年生れとして矛盾を解消している。
- (12) 善正寺『由來記』では、「同鄉有禪庵、此主望懇切也、故了師此兒授于庵主、庵主大喜而受之」というよう、転宗を多福寺庵主の望によるものと記している。
- (13) 前出「禪宗法系譜」には、鐵山嗣法に名がみえていない。
- (14) 鐵山宗鈍の伝は『延寶伝燈錄』（大日本佛教全書所収）にみえる。
- (15) 古田紹欽「鐵山宗鈍」（禪學研究57号）所収。
- (16) 伝未詳。「禪宗法系譜」に大輝祥選の嗣法に名がみえる。
- (17) 「禪宗法系譜」伝未詳。
- (18) 抽稿「近世初期の仏教復古運動」（下出積与博士還暦記念会『日本における國家と仏教』所収）、「幕藩制仏教の形成過程」（大谷大学国史学会五十周年記念『日本人の生活と信仰』所収）。諸僧の行状などは右に詳述したので註記を略した。
- (19) 『行由』には、「海部府君戸部侍郎一雲大居士見而喜、我郷里出怎麼納子、峯豊陽多福虛席招之住、爾後寛永八辛未春、再造當于多福」とみえる。また『臼杵寺社考』では、「歳月
- (20) 寛永八辛未年、一通公御室以德雲殿旧宅、而改替多福本堂、二世雪窓和尚住職之時也。其時入院也。多福寺額、今茲仲夏上浣之曰書之、大明興福禪院比丘如定筆跡也。同二月七日始工、五月廿一日多福方丈庫裡衆寮客殿御下成、奉行稻川源左衛門吉治、小奉行芝崎半右衛門、太田久助宗政」と、その再建の相様を具体的に伝えている。
- (21) 『禪學大辭典』による。如定の伝は山本悦心『黃檗東渡僧宝伝』にみえるとあるが、本書を参照しえなかつた。
- (22) 保科正光・正之に關しては『寛政重修諸家譜』卷第二百五十九による。
- (23) これらの諸記事については、前掲註(18)抽稿に言及したので、詳細についてはそれにゆづる。
- (24) 『石平道人行業記』（『鈴木正三道人全集』所収）。なお、この書や『行狀』などでも「玄俊」の名でみえているが、賢俊良永が正しい。詳細については註(18)抽稿参照。
- (25) 『律苑僧宝伝』（大日本佛教全書所収）に伝がみえる。『行狀』では恕周とするが、右の伝によつて如周とする。
- (26) 『本朝高僧伝』（大日本佛教全書所収）に伝がみえる。
- (27) 註(18)抽稿参照。
- (28) 『長崎市史』地誌編仏寺部下、一五三頁。
- (29) 同右、一五三頁にこの説がみえる。
- (30) 井上政重の伝は『寛政重修諸家譜』卷第二百四十三にみえるが、以下の行動については『徳川実紀』（国史大系所収）による。

㉙ ㉚ ㉛ ㉜

辻善之助『日本仏教史』及び『長崎市史』興福寺の項。
これらについては註㉙拙稿参照。

『破邪問答』(真宗全書所収)
『仮名答書』(同右)

㉖

最近の研究に源了円『日本の禪語錄¹⁷、鐵眼』があり、西
嶮との関係を詳述している。

(本学助教授 日本仏教史学) 西